

# 在日インドネシア看護師が求める子どものキャリア教育

## — 長期縦断調査に基づいて —

○大 森 弘 子<sup>1)</sup>・松 本 典 子<sup>2)</sup>・倉 鋪 桂 子<sup>3)</sup>

キーワード：子どものキャリア教育、インドネシア看護師、「ハラール対応」の給食、ナラティブ・アプローチ

### I. 問題と目的

近年、日本の病院や高齢者介護施設で働くインドネシア看護師がみられるようになった。法務省（2021）の報告では、2012年から2021年の在日インドネシア人の増加率は2.34倍であり、在日外国人の対前年伸び率はベトナムに次いで23.4%と2番目に高い（厚生労働省，2019）。このことは、日本で働くインドネシア人が増加していることを意味する。中・長期間在留する在日インドネシア人は、やがて家庭を持ち、インドネシアにルーツのある子どもが増えることになる。その後、その子どもは、幼児教育や初等教育の機関で生活したり教育を受けたりすることも想定される。そのため、日本の幼児教育や初等教育の機関はインドネシアにルーツのある子どもを受け入れ、社会的包摂に取り組むと共に、学校教育の先にある就労をも視野に入れたキャリア教育の推進に取り組む必要がある。なお、この時受入れ側の幼児教育や初等教育機関は、目の前の子どもへの最適な個別支援を配慮するため、インドネシア人の

86.69%がイスラム教徒（外務省，2019）であることや、インドネシアが多様な民族的・文化的・地域的要素を内包しながら統一を保っている国（中矢，1998，p.15）であることも念頭に置かなければならない。

キャリアとは「自己と環境とを適応させること」（北村，2019，p.34）であり、日本におけるキャリア教育が公文書で初めて使用されたのは、1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」である。その中で「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と示された。また、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と示された（中央教育審議会，2011，p.16）。つまり、キャリア教育とは、子どもが「生きる力」を身に付け、社会人・職業人として自立していくことができるように導く育みである。とりわけ、幼児教育と小学校教育の接続の重要性は指摘されており、発達段階にふさわしいキャリア形成の土台作り

<sup>1)</sup> 京都文教大学 <sup>2)</sup> 姫路ハーベスト医療福祉専門学校 <sup>3)</sup> 鳥根県立大学

が幼児教育に求められていると考えられる。

このキャリア教育の問題は、人々の「在り方・生き方」と大きく関わっている。日本では、高等教育機関への進学率が高く、産業構造の変化や雇用形態の多様化等を背景として、将来への不透明さが増加する傾向にある。そのため、保護者は、「本人（子ども自身）がやりたいことをやってほしい」と前置きしつつも、現在約半数の保護者は我が子に「公務員」か「一般企業の会社員」になってほしいと考えている（日本トレンドリサーチ & 青山ラジュボークリニック, 2022）。その理由は、「公務員は収入や地位が安定しているから」「会社員は現実的だから」等であり、保護者には子どもの将来に安定を願う現実的な考えが示された。では、インドネシアにルーツのある子どもの夢や希望、職業適性<sup>1)</sup>と、その保護者の夢や希望にずれは生じていないのであろうか。また、健康に関する知識と技能を持つ在日インドネシア看護師は、子どものキャリア教育に何を求めているのだろうか。在日インドネシア人が増加する中、在日インドネシア人が求める子どものキャリア教育を調査した研究は見当たらない。

以上のことから、本研究の目的は、在日インドネシア看護師が子どもにどのようなキャリア教育を求めているのか、また、子どものキャリア教育のためにどのような支援を日本の幼児教育や初等教育の機関に求めているのかを明らかにする事である。具体的には、インドネシアでの生活を探索するための現地調査、及び在日インドネシア看護師 A さんを対象に、201X 年から約 18 カ月ごとに 4 回の長期縦断調査を実施し、そこで発せられた語りを質的分析法の一つであるナラティブ・アプローチを用いて検討を試みた。その結果を基に、在日インドネシア看護師が日本で生活する中で求める子どものキャリア教育に関して分析し考察する。なお、ナラ

ティブとは「語り」という意味であり、ナラティブを用いたアプローチ手法のナラティブ・アプローチとは、「相手の語る物語（narrative）の伝承行為の中で、相手の知識がどのように構築されるのかを理解しようとする」（Kohler Riessman, 2014, p.26）、構造分析である。

## Ⅱ. インドネシアにおける看護師養成と子どもの教育

インドネシアにおける看護師の分類は、D3（Diploma3:看護専門学校3年課程）、S1（学士）、S2（修士）、S3（博士）等が存在し、看護師教育機関 645 校中、D3 の看護師養成機関は 341 校と最多である（JICA, 2012）。D3 のカリキュラムのコンセプトとして、「国内外で競える能力のあるプロフェッショナルな新人看護師を輩出する」（川口, 2009）と示され、インドネシアでは「国外」で看護師が働くことを推奨している。また、川口（2009）によると、一般教養的な科目は、「自己実現と内面的な向上に関する科目」「学問的・技術的な科目」「実践スキルに関する科目」「行動様式に関する科目」「社会性の向上に関する科目」から構成されている。「自己実現と内面的な向上に関する科目」の内容は、「宗教」「国民権」「国語」であり、科学的知識や技能が必要な看護師においても、宗教を学ぶことが大事であることが分かる。

ここでは、第1筆者が2012年と2014年に現地調査で収集したインドネシア（ジャカルタ及びスラバヤ等）の親子や看護師養成機関の学生について触れることとする。図1は、あるイスラム教会が運営する児童養護施設<sup>2)</sup>内の様子である。イスラム教徒の教えの一つに、「目上の人を敬う」ことがあり、第1筆者らが訪問した際、入所している全ての子どもたちは、第1筆者らの右手の甲を自分の額に当ててお辞儀を

した。また、老朽化して雨漏りで破損の危険性が高い建物の中、4歳から12歳までの子どもたち（全男児）が共同生活をし、子ども一人が自由に使えるロッカーは、約50cm四方の箱1個である。そのような劣悪な環境の中、12歳のBくんは「(児童養護施設は) 食べることも学校に行くことも学ぶこともできる居場所です」と語って喜び、「病気を患っても貧しくて医者にも診てもらえない家族のために、将来は医者になりたい」という夢を語った

(図2)。

他方、図3は、裕福な家庭の母親が乳児に粉ミルクを授乳している様子である。伝統的な布(パティック)を素材にした洋服屋において、子どもを泣かせないようにと、粉ミルクを子どもに飲ませていた。インドネシアでは、「子どもを泣かせないことが良い子育て」とされ、洋服屋の店内にもかかわらず、粉ミルクやお菓子を好きなだけ子どもに与えていた。母親は、ヒジャブ(イスラム教を信じている女性が頭を覆う布)



図1 児童養護施設内の様子



図2 将来は医者になりたいBくん



図3 インドネシアでの授乳の様子



図4 看護師養成機関の図書館で学ぶ学生の様子

注) 図1～図4: 第1筆者撮影

を着用して、身内の男性以外には、顔と手首から先しか見せてはいけない宗教上の戒律を守り、「将来、男の子を医者にしたい」と語った。

以上、インドネシアでは、人口が増加し急速に産業化している国の例に見られるように、膨大な富の集積と経済成長の全体的な指標の伸びの中で、所得格差が一層広がる傾向にある。また、多くのインドネシア保護者の子育ては、イスラム教の教えによる影響が大きく、「イスラム教の良いしつけ」を忠実に守り、子どもが「医者」になるためのキャリア教育とその支援を重んじていた。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 研究協力者

日本語で自分自身の気持ちを語ることができ、子育てをしている在日インドネシア看護師のAさんを本研究の研究協力者とした。Aさんと面接者（第1筆者・第3筆者）は、第1回目の面接（語り）実施までの面識はなかった。

#### 2. データ収集方法

201X年、第3筆者と親交がある高齢者介護施設において、「面接調査に協力しても良い」と回答したAさん1名に面接調査を依頼し、その後、約18カ月ごとに4回の長期縦断調査を実施した。また、面接方法は半構造的面接法で行った。面接の様子は研究協力者の許可を得てICレコーダーで記録した。面接時間は一回60分～90分であった。

#### 3. 調査時期

第1回目の面接（語り）：201X年12月

第2回目の面接（語り）：201X年12月+18  
カ月

第3回目の面接（語り）：201X年12月+32

カ月

第4回目の面接（語り）：201X年12月+53

カ月

#### 4. 調査項目

面接項目は、①研究協力者の基本的属性（性別、年齢、子どもの年齢、インドネシアで保持する資格）、②研究協力者の価値観を理解するため、9つの価値観カード<sup>3)</sup>を用いての大事にする価値観とその理由、③日本の介護福祉士を選択して来日した理由、④周囲の人から子どものキャリア教育についてどのような支援を受けたか、⑤将来子どもにどのような職業を選んでほしいと考えているのか等であり、①～⑤の面接項目への語りを求めた。

在日インドネシア看護師が子どもにどのようなキャリア教育を求めているのか、子どものキャリア教育のためにどのような支援を必要としているのかについて面接を通して探索した。

#### 5. 分析方法

在日インドネシア看護師に着目し、研究協力者の視点から理論を構築するため、データ分析法には、ナラティブ・アプローチ (Kohler Riessman, 2008) を用いた。面接終了後、録音された語りを逐語録に起こした。その際、Aさんの語りを中心に、できるだけ生の言葉を活かし、文脈に沿ってその質的意味を解釈し整理した。解釈の妥当性は、学校教育学を学び社会福祉士・保育者である第1筆者、教育学を学び保育者である第2筆者、看護学を学び質的分析の訓練を受けた看護師である第3筆者の3名によって繰り返し検討を行った。

#### 6. 倫理的配慮

面接にあたって最初に研究目的と内容の書面を示して研究協力者に口頭で説明した。また、



面接途中であっても参加を中止することができること、公の目的以外使用しないこと、データの管理は鍵がかかる戸棚でファイルに綴じ、他の人が見えないように管理し、終了後はシュレッターにかけて廃棄する等について研究協力者に説明し、同意書にサインを得た。なお、本研究は人を対象とした研究であり、研究協力者の人権及び尊厳を重んじ、個人情報の保護に留意する必要があると判断した。そこで、本研究は、佛教大学「人を対象とする研究計画等審査」倫理審査委員会の承認を得た（H24-28）。また、実施に関わる配慮等は、日本保育学会倫理綱領ガイドブック（2010）の倫理基準に準じた。

#### IV. 結果と考察

Aさんはインドネシア生まれの在日看護師である。Aさんはインドネシアの都市部で、学校教師である共働きの両親の家庭で生まれ育った。Aさんは高等学校卒業後、インドネシアのD3で看護を学び、インドネシアの看護師資格を取得した。看護師としてインドネシアの小児病棟で5年間勤務後、出稼ぎのために来日した。来日したAさんは農村部の高齢者介護施設で勤務しながら、介護福祉士の国家試験に挑戦し合格した。なぜならば、Aさんは日本においては看護師資格よりも介護福祉士資格の方が簡単に取得できると考えたからであった。また、介護福祉士資格取得と同時に、家族（夫、子ども）を呼び寄せ、農村部の高齢者介護施設で10年間勤務した後、ケアマネジャー（介護支援専門員）の資格を取った。さらに、日本在留資格の更新に上限がなく日本で介護福祉士として永住的に就労できる権利を得た。待遇は、日本人介護職員と同等以上の報酬が支払われている。現在は都市部の高齢者介護施設で働いている。

表1には、Aさんの語りから得られたAさ

んの年譜を示す。また、Aさんの語りに基づき、「子どものキャリア」「子どもの学校生活」の事例と考察を示す。

表1 Aさんの語りに基づいたAさんの年譜

Aさんの年齢	出来事
0歳	Aさんがインドネシアで誕生 8人きょうだいの第1子
18歳	D3（看護専門学校）に入学
21歳	インドネシアの小児病棟で看護師として勤務
22歳	結婚し、子ども（男児）を出産
26歳	Aさんが出稼ぎのために来日 農村部の高齢者介護施設で勤務
30歳	介護福祉士資格取得 夫と子どもを呼び寄せ
36歳	日本の永住権取得
40歳	ケアマネジャーとして都市部の高齢者介護施設で勤務

#### 1. 子どものキャリア

##### (1) 子どもの夢：1回目の語り

面接者：ここに9枚のカードがあります。Aさんが一番大事だと思うものから並べてください。

Aさん：（9枚のカードを、夢→家族→愛→友情→自由→楽しさ→健康→社会秩序→お金、の順に並べてから）今の夢は介護福祉士に合格して。本当は（日本の）看護の国家試験を受けたいです。それから家族を日本に呼んで、子どもがお医者さんになりたいという夢を持っているので、その夢を叶えてあげたい。

面接者：子どものことを思って？

Aさん：今一番大事なのは家族なんです。家族と日本に住みたくて。インドネシアでは家族をすごく大事にしています。子どもも最初は、（母親である

私と別れて)うつ状態になっていたと思います。(インドネシアの)通知簿も1とか2とかだったんです。学校に行っても頭が痛い(早退して帰ることが多くなりました)。その時は私も(出稼ぎは)3年間だけと決めていましたが、子どもがどんどんよくなって…。

Aさんが日本で家族と共に生き子どもの夢を叶えるため、日本語を学び、介護福祉士資格取得のための勉強をしながら介護の仕事に従事していた。奥島(2010)は、「インドネシア人が全般に移住労働には積極的でも海外永住率は低く、いずれは家族・親族と共に暮らしたい、ストレスフルな先進諸国で一生は働きたくない、子弟のイスラム教育が難しい等の理由で帰国している」(p.332)ことを指摘している。しかし、Aさんは日本で家族と共に生きたいという夢を持ち、他の帰国した多くのインドネシア人とは違って、日本での永住を求めている。この違いは何に起因しているのか疑問が残る。

## (2) Aさんの夢：3回目の語り

面接者：ここに9枚のカードがあります。Aさんが一番大事だと思うものから並べてください。

Aさん：(9枚のカードをゆっくりと、健康→愛→お金→家族→友情→楽しさ→自由→社会秩序→夢、の順に並べてから)健康が一番。健康がなかったらアウトかな。家族(が日本に)来て愛が現実になった。仕事もすごい大事にしていますね。家族(が日本に)来て私(は)、お金がもっとあったら、子どもに塾に行かせたい。(日本の)大学にも(行かせたい)。せっかく

日本にいるのに。私、本当は子どもをお医者さんにさせたい。インドネシアの大学なら(医学部に)行けるかもしれない。でもせっかく日本に来たのに(なぜ)インドネシア(の大学にしか行けないのか)と思う。子どもはお母さんと一緒なら(日本でも)と。

面接者：医者になぜなってほしいのですか？

Aさんが看護師だから？

Aさん：私の大家族にお医者さんがいないし。家族で一人はお医者さんになったら良いかなと。子どもは男の子なので、ちょっと、教育的には高い方が良いと思っています。子どもは頭が良いと思っている。子どもの意見も聞きたいが。

呼び寄せたAさんの子どもは、日本で安心できる安全基地を持ち、言葉でのコミュニケーションをとることができる様になり、友達や地域の人々との繋がりを通して、インドネシアにいた頃とは違った夢を自分の意志で持つことになるのかもしれない。Aさんの子どもが自らの意志で夢を語った時には、その夢を実現させるために、社会的・職業的自立に向けて必要となる能力や態度を育て、主体的に進路を選択する能力を育てようとするキャリア教育が必要となると考えられる。

子どものキャリア教育において、保護者の夢が大きく左右する。また、小さい頃に抱いた夢は、未来へと進む子どものモチベーションにもなっている。Aさんは子どもに「お医者さんになってほしい」と願い、子どもの夢とも一致している。Aさんの夢は、安定を求めて「公務員」や「一般企業の会社員」になってほしいと考えている日本の保護者と異なることが分かった。

また、子どもを医者にさせるため、普通プライドが高いインドネシア人 (PAGI PAGI POST, 2019) の A さんが「お金が大事」と言い出し、家族を日本に呼び寄せた後の A さんの価値観の変化が顕著にみられた。

### (3) 子どもに任せるキャリア：4 回目の語り

面接者：日本に住むインドネシアの方から、「インドネシア人は、子どもの頭が良くなるようにと母乳で子どもを育てている」と聞いた事がありますが、本当ですか？

A さん：一つの頭が良くなる方法（です）。もちろん、良い食べ物とか。それも一つの方法（です）。我が子が勉強を好きか嫌いか。頭が良くても勉強嫌い（の子ども）がいる。子どもに（は）お医者さんになってほしい。子どもはお医者さんに興味がない。だから、子どもに任せている。面接者：A さんの子育てはどうですか？

A さん：インドネシアにいた時は子育てもしつけも厳しかった。（日本で）子どもの反抗期がひどかった。だから（日本に来て）いろいろな子育て方法を学んだ。だから、日本やヨーロッパ、アメリカで主流の「褒める、怒らず」をやってみた。褒める（事）は子どもにとって大事です。子育ての仕方が分かっていない時、親が怒ると子どもも短気になる。子どもが（日本に）来た時、私は厳しすぎた。いろいろ考えて、怒るとすごく良くなる子どももいるし、嫌になる子どももいる。反抗期がもっとひどくなる。子どもに合わせる。どんな子ども（か、個性はどうか）みたいな。私

の子どもの場合は、怒らない方が自分で勉強する。子どもは「勉強しなさい、しなさい」とは言われたくない。私（が）勉強の事を言わなくなったら、勉強して本を読んだ。私が働いていた時に、子どもが暴力を振るい、石を投げたりしていた。（小学校内の）子どもの先生による相談の時、先生が「子どもが（お母さんに）みて（振り向いて）ほしい」（と願っていて）、それで叩いたり、怒ったりするほど、お母さんがみて（振り向いて）くれる（と思っているので）、子どもに「どうしたの？」「何がほしいの？」と聞いて（あげて下さい）と教えてくれました。

A さんの子どもは、インドネシアから来日し、やっと母親と一緒に暮らせる喜びが大きかったと推測される。その喜びと共に、大きな不安やこれまでの寂しさの中で培われた感情等もあった筈である。A さんの子どもの複雑な気持ちは計り知れない。具体的な A さんの子どもの行動は、暴力を振ったり、石を投げたりして、これまでの心の叫びが表出されたのであろう。また、子どもにとっては、「医者になってほしい」と願う母親 A さんの思いが重圧となっていたのかもしれない。

一般的に日本において、医者になるまでのプロセスは非常に厳しい。子どもは保護者に認められたい思いから、医科大学に入るために必死に勉強するが、途中で挫折してしまうことも多くみられる。医科大学等という重要な選択を迫られる場面での理論は、キャリアの理論「職業的発達理論」<sup>4)</sup>の中での「意思決定理論」で説明できる。意思決定理論では「人は（個人の価値観や希望により異なる）利益を最大にし、

損失を最小限にするよう行動するものだと考えられている (Gelatt, 1962)。とりわけ教育分野において、個性の尊重や創造性が注目され始め、柔軟性に富んだキャリア教育が求められた。Gelatt (1989) は、将来に向かって柔軟に意思決定を行おうと、想像力・直感・柔軟性・社会の不確実性等を積極的に意思決定プロセスに取り入れた「積極的不確実性 (Positive Uncertainty)」を提唱した。

## 2. 子どもの学校生活

### (1) 子どもの学校生活での困り事：2回目の語り

面接者：子どもを呼び寄せてからストレスを感じることはありますか？

Aさん：最初だけは大変でしたが、今は少し楽になりました…と思います。また、子どもは日本語が分からず、友だちもできていなかった。すごく（何度も）「インドネシアに帰りたい」「インドネシアの友達に会いたい」「おばあさんに会いたい」と毎朝、学校に行く前に(Aさんと)喧嘩になった。(子どもの) 機嫌が悪くなった。学校に行きたくなかった。

面接者：それに何か月位かかりましたか？

Aさん：6カ月位かかりました。学校のシステム、なんか、あの～、何ていうか、あのう～、外国人に対してよくみてくれる。

面接者：きめ細かい？

Aさん：はい。ちゃんと先生も…わざわざ一人(の先生が)学校に来て教えてくれる。インドネシア語ができないけれど、日本語がすごく上手いフィリピン人の先生がいます。子どもに日本語で教えてくれます。算数も子どもはすごい苦手だったけれど、学校

の先生が個人的に教えてくれたりすることもある。

面接者：子どもを育てながら一番困った事は何かですか？

Aさん：「宿題」です。難しいし、毎日あります。あの～でもやはり、教育というか子どもの宿題を教えてもらえる人がいたらいいんじゃないかな。

Aさんは、日本の小学校に入って間もない我が子の学校生活での困り事について、苦労した事やその支援について語った。Aさんの子どもが通う日本の小学校では、生活習慣向上の取り組みの一環として、「早寝早起き」「ノーテレビ」「家庭学習」「挨拶」の目標を小学校と家庭で決め、家庭で取り組むのである。ただ、Aさんにとって家庭学習の一部である宿題は難しく、宿題への支援の必要性が明らかになった。

### (2) 学校生活での言葉の壁といじめ：3回目の語り

面接者：お子さんはどうですか？

Aさん：子どもはおとなより慣れやすい。私より子どもの方が日本語が上手です。日本に来て3年目です。3月に来て、4月に(は日本の)学校(に通って)2年5カ月(になります)。言葉に問題はありません。漢字もかけます。日本語で全部読めます。読めない漢字もありますが、何とか意味が分かります。全く分からなかったら調べたりしています。…(中略)…

面接者：いじめがあるのですか？

Aさん：いじめはないです。私の子どもは何でも言います。例えば、「あの人がかわいいね」と言います。いじめはないよ、楽しいと言います。家では今



は言葉がインドネシア語、英語、日本語ごちゃごちゃです。言葉がおかしくなります。

Aさんは言葉の壁を克服するために3年位の期間が必要であると語った。子どもが園や学校等の集団生活の中で日々過ごしていると、言葉は早期に上達し、言葉の壁を比較的たやすく乗り越えることができる。しかしそのためには、毎日集団生活の中へ入っていくことが重要であり、その力を生み出す礎には、保護者や周囲の人々の確かな愛情を子どもが感じ取れることが重要である。

Aさんが夫と子どもを呼び寄せた事は、日本の学校を含む地域での生活にじわじわと根をはっていくと考えられる。具体的に、Aさんの夫は地域のスーパーマーケットでアルバイトをしたり、Aさんの子どもは地域で友達や知り合いができたりにしている。ただし、Aさんのように家族を呼び寄せた場合、子どもの教育への支援が必要になる。教育支援に関して、Aさん家族だけでは解決できず、その地域社会の中に支援する人や場所が必要である。それが実現した時、Aさん家族が安心して暮らせる豊かな地域社会となるであろう。つまり、大森・倉舗(2014)が示した「日本人が異文化に触れ、人と人が関わり合い、地域の中に助け合える居場所を作る」(p.214)ことを支持するものである。

### (3) 学校生活でもイスラムの文化を守りたい： 4 回目の語り

面接者：子育てをしている在日インドネシア人に悩みはありますか？

Aさん：子どもの悩み、悩みは「食べ物」だけ。日本料理にはお酒が入っている、それが難しい。豚肉が入っている、それが困る。

豚肉やお酒が入っていて、子どもが給食を食べられないことがあった。学校で豚肉が入った給食が食べられず、お腹を空かせて帰ってきた。可哀そうだった。

面接者：日常生活で困ったことはありますか？

Aさん：在日の友達が、(子どもに)インドネシア語と日本語をしゃべれるようにしたい(と願っている)。だんなさんは日本人で、子どもは今3歳です。子どもがあまりしゃべることができない。両方(両親)ともに悩んでいて(子どもが)話せない。それが悩み。(インドネシア語か日本語の)言葉を迷っているのかも。

大形(2020)によると、イスラムの文化については、食べてよいものと食べていけないものが戒律で定められ、日本にはムスリムの食のタブーに対応したサービス「ハラール対応」への取り組みが今まで以上に求められている。イスラム教徒の保護者は、日本の幼児教育及び初等教育機関で提供される給食に対して、イスラムの文化で禁止されている豚肉やお酒等抜きの給食を求めていることが分かった。

## V. まとめと今後の課題

本研究では、日本で家族と共に生きる在日インドネシア看護師が子どもにどのようなキャリア教育を求めているのか、また、子どものキャリア教育のためにどのような支援を日本の幼児教育や初等教育機関に求めているのかについて、現地調査及び長期縦断調査に基づき、ナラティブ・アプローチを用いて分析し考察した。主に次のような点が明らかになった。

第1に、在日インドネシア看護師は、日本の幼児教育や初等教育機関に、宿題への支援と、「ハラル対応」の給食を求めている事が明らかになった。第2に、在日インドネシア看護師は、子どもを大学に進学させるための資金が不足しており、経済的支援を求めている事が明らかになった。第3に、在日インドネシア看護師は、子どもを医者にするためのキャリア教育を望んでいた。

最後に、今後の課題を挙げる。第1に、今回はAさんから見出されなかったが、日本で家族と共に生きたいというモチベーションは何に起因しているのか疑問が残る。第2に、世の中の不確実性から、Aさんの子どもはいかにキャリア形成していくのか、キャリア形成のより良い結果に繋がることを信じての追跡調査を行うことが課題である。今後、さらなる在日インドネシア看護師への長期縦断調査と情報収集を継続的に行い、在日インドネシア看護師が求める子どものキャリア教育を多角的に分析し、より精緻化していく必要がある。

より良い未来を創るためには、インドネシアにルーツのある子どもを含む全ての子どもたちが、お互いの多様な価値観を認め合い、相互理解し、共に生きる道を探ることが重要であると考えられる。

## 註

- 1) 職業適性とは、広義には「一定の職務を遂行するのに必要な個人の能力的・性格的背景である」(伊藤, 2004, p.73)。
- 2) 例えば、日本における児童養護施設とは、「保護者のない児童(乳児を除く。ただし、安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合には、乳児を含む。以下この条において同じ。)、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所し

た者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設」(昭和22年法律第164号、児童福祉法第41条)と定義されている。

- 3) 価値観カードは、山田(2003, p.50)の8つの価値(愛、お金、健康、社会秩序、自由、楽しさ、友情、夢)に、研究対象者が大事とするであろう「食」の項目を加えた。第1筆者が9つの価値観カードを漢字・ひらがな・英語標記で作成し、全面接時に提示した。
- 4) 一般的に、キャリア教育に関わる基礎理論として、大別して「特性・因子理論」「精神分析(構造)理論」「職業的発達理論」がある(伊藤, 2004, pp.137-148)。

## 引用文献

- 中央教育審議会：「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」、文部科学省、pp.1-91、1999年。
- 中央教育審議会：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」、文部科学省、pp.1-100、2011年。
- 外務省：「インドネシア基礎データ」、外務省出入国在留管理庁統計、2021年。
- Gelatt, H. B. (1962) : Decision-making: A conceptual frame of reference for counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 9, 240-245.
- Gelatt, H. B. (1989) : Positive uncertainty: A new decision-making framework for counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 252-256.
- 法務省：「2021年の在留外国人の増加率」、2021年。  
<https://www.moj.go.jp/isA/content/001356650.pdf>  
 (2022年10月3日閲覧)。
- 伊藤一雄：「キャリア教育の展開—職業教育及び職業指導—」、佛敎大学通信教育部、2004年。
- JICA(独立行政法人国際協力機構)：「インドネシア国産業人材、看護・介護分野人材育成事業 基礎情報収集・確認調査」、株式会社日本開発サービスシステム科学コンサルタンツ株式会社、pp.70-77、2012年。
- 川口貞親：「日本、フィリピン、インドネシアの看護教育カリキュラムの比較」、九州大学アジア総合政策セ

- ンター紀要 (3)、pp.91-104、2009 年.
- 北村雅昭：「不確実性の時代におけるキャリアと キャリア・アダプタビリティ」、大手前短期大学研究集録 (38)、pp.31-48、2019 年.
- Kohler Riessman, Catherine. (2008) : Narrative methods for the human sciences. Sage Publications. (大久保 功子・宮坂道夫／監訳：『人間科学のためのナラティブ研究法』、クオリティケア、2014 年.)
- 厚生労働省：「外国人雇用状況」の届出状況まとめ (令和元年 10 月末現在)」、2019 年.  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_09109.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_09109.html) (2022 年 10 月 3 日閲覧).
- 厚生労働省：「社会的養護の施設等について-児童養護施設の概要-」  
[https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki\\_yougo/01.html](https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/01.html) (2022 年 10 月 3 日閲覧).
- 中矢礼美：『インドネシアにおける地域科の成立・展開過程の研究』、広島大学博士論文、1998 年.
- 日本保育学会倫理綱領ガイドブック編集委員会／編：『保育学研究倫理ガイドブック』、フレーベル館、2010 年.
- 日本トレンドリサーチ & 青山ラジューボークリニック：「子供に将来なつてほしい職業」、2022 年.  
<https://articles/793c0d51f535964e547c4f938fd8567d13719f08?page=1> (2022 年 10 月 3 日閲覧).
- 大形里美：「日本における「ハラール対応」の現状と課題-レストラン『極味や』による「ハラール対応」の取り組みと福岡マスジドにおける「ハラール認証」無料発行の意義-」、九州国際大学 国際・経済論集(6)、pp.1-36、2020 年.
- 大森弘子・倉鋪桂子：「EPA インドネシア介護福祉士の高齢者施設における就労意識-在日 5 年目における面接調査を通して-」、日本看護福祉学会誌 19 (2)、pp.205-217、2014 年.
- 奥島美夏：「インドネシア人看護師・介護福祉士候補の学習実態：背景と課題」、国際社会研究 (1)、pp.295-342、2010 年.
- PAGI PAGI POST：「インドネシア人の国民性」、2019 年.  
<https://news.lifenesia.com/?p=2415> (2022 年 10 月 3 日閲覧).
- 山田容：「8 つの価値」『対人援助の基礎』、ミネルヴァ書房、pp.48-51、2003 年.

## 謝辞

本研究を進めるにあたり面接調査に快く協力してくださいました在日インドネシア看護師の A さん、現地調査に協力してくださいました B くんをはじめとしてインドネシアの皆様にご心より感謝申し上げます。また、インドネシア現地調査をするにあたり、京都大学 安里和晃先生には調査の段取りや現地でのご指導をいただきました。ここに謝意を表します。

*Abstract*

## Child Career Education sought by an Indonesian nurse employed in Japan and determined by a long-term longitudinal study

Hiroko OHMORI <sup>1)</sup> & Noriko MATSUMOTO <sup>2)</sup>  
& Keiko KURASHIKI <sup>3)</sup>

The purpose of this study is to clarify the child career education sought by an Indonesian nurse working in Japan, and what kind of support is sought from Japanese early childhood and primary school education. This study incorporated field research, with an interview conducted with an Indonesian nurse over a long-time duration and analyzed using a narrative approach.

We found (1) an Indonesian nurse working in Japan who seeks help for her child-homework support and 'halal-friendly' meals; (2) financial support for her child to enable a college education and (3) provision of child career education for her child to enable her child to eventually become a doctor.

Key words: child career education, Indonesian nurse, 'halal-friendly' meals, narrative approach

---

<sup>1)</sup> Faculty of Child Education <sup>2)</sup> Himeji Harvest-School <sup>3)</sup> The University of Shimane